

## 万葉集の歌にみる男女くそれぞれの立場く

北川 和 秀

◎イントロを兼ねてく「令和」と万葉集

### 1. 梅花の歌三十二首

①元号「令和」は万葉集巻五に収録された梅花宴歌三十二首の序文から採られた。

②万葉集の歌の中で序文を伴うのは巻五の特徴。

\*歌の前に題詞の付いている作品は多い。

柿本朝臣人麻呂の歌一首

・淡海の海夕波千鳥汝が鳴けば情もしのに古思ほゆ（三・二二六六）

\*題詞と歌との間に漢文の序のある歌もある（ただし、序文のある作品はほぼ巻五に限定。他巻では大伴家持などの作にわずかにある程度）

子等を思ふ歌一首 序を并せたり

釈迦如来い、金口に正に説きたまはく、等しく衆生を思ふこと、羅睺羅の如しとのたまへり。又説きたまはく、愛は子に過ぎたりといふこと無しとのたまへり。至極の大聖すら尚し子を愛しふる心あり。況むや世間の蒼生の、誰かは子を愛しびずあらめや。

・瓜食めば 子ども思ほゆ 栗食めば まして偲はゆ 何処より 来りしもの  
そ 眼交にもとな懸りて 安眠し寝さぬ（五・八〇二）

### 反歌

・銀も金も玉も何せむに勝れる宝子に及かめやも（八〇三）

③梅花の歌がよまれたのは大宰府の大伴旅人の邸。大宰府は九州に置かれた朝廷の出先機関で、「遠の朝廷」と呼ばれた。当時の長官は大伴旅人。中納言で兼ねていた。

④天平二年正月十三日に大伴旅人邸で梅花の宴が催された。

⑤この日は現代の太陽暦では七三〇年二月八日に当たる。立春の三日後。

⑥参加者は大宰府の役人と九州諸国の役人、合計三十二名で、一人一首ずつの歌が記録されている。

### 2. 梅花の歌の序文

○本文、訓読文、口語訳は別紙参照。

### 3. 帰田賦と蘭亭序

- ① 帰田賦……後漢の官人・文人・科学者である張衡（七八〜一三九年）が作った文章。『礼記』や『詩経』の影響を強く受けている。永和三年（一三八）の成立か。官職を辞し、田舎の穏やかな自然の中で暮らし、書を読み、文筆に勤しもうという内容。六世紀成立の『文選』に収録されている。
- ② 蘭亭序……東晋の時代、永和九年（三五三）三月三日に、王羲之は名士を蘭亭（浙江省紹興市の南西にあつた亭）に招き、四十二名で曲水の宴を開いた。その時に作られた詩二十七編（蘭亭集）の序文として王羲之が書いたもの（草稿）。書の名品として知られる。

### ③ 蘭亭序と梅花宴序とは趣旨が共通。

- ・ 永和九年、歳在癸丑。暮春之初、会于会稽山陰之蘭亭。脩禊事也。（蘭亭序）
- （永和九年、歳は癸丑に在り。暮春の初め、会稽山陰の蘭亭に会す。禊事を脩むるなり。）

- ・ 天平二年正月十三日、萃于帥老之宅、申宴会也。（梅花宴序）
- （天平二年正月十三日、帥の老の宅に萃まり、宴会を申ぶ。）

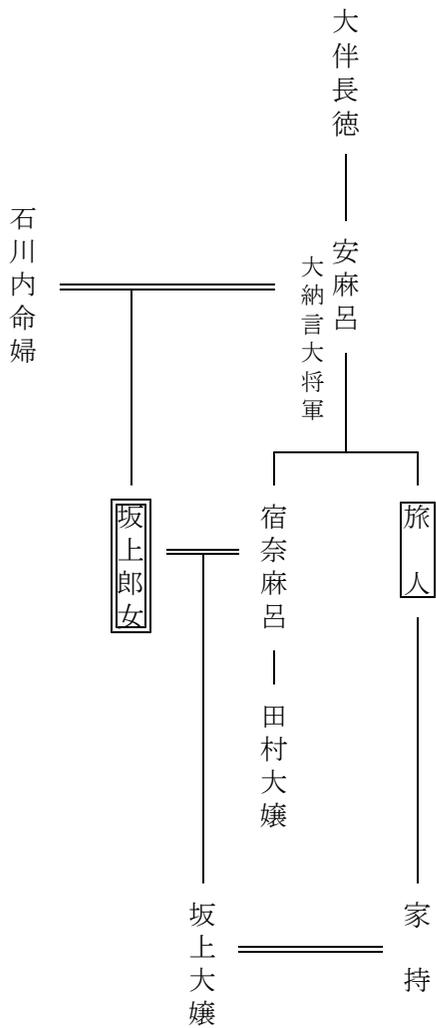
### ④ 蘭亭序と梅花宴序とは字句の似た部分もある。

- ・ 是日也、天朗氣清、惠風和暢。（是の日、天朗らかに氣清く、惠風和暢せり。）
  - ・ 于時、初春令月、氣淑風和。（時に、初春の令月にして、氣淑く風和らぐ。）
- ⑤ 帰田賦と梅花宴序とは字句のよく似た部分がある。
- ・ 於是、仲春令月、時和氣清。（ここに、仲春の令月にして、時和らぎ氣清し。）
  - ・ 于時、初春令月、氣淑風和。（時に、初春の令月にして、氣淑く風和らぐ。）

### 4. 元号「令和」について

- ① 漢籍からでなく、日本の古典を典拠とした最初の元号。
- ② ただし、古代日本の元号には文献の典拠のないものが多い。
- ・ 大宝、慶雲、和銅、靈龜、養老、神龜、天平、天平感宝、などなど、いずれも喜ばしいことが起こったことに由来する元号。
- ③ 当時の国内で最も国際的な場所であった大宰府で開催された梅花の宴（梅は渡来植物）における漢文の序を典拠にしたものであり、梅花宴序には漢籍の影響も大きい。そういう意味では、「令和」は日本の古典を典拠にはいるが、外国との国際交流、文化交流をも象徴する元号といえよう。
- ④ 三十二人の人々が集まって歌を作った。その序文であることにも意味がある。
- ⑤ 典拠の文脈は「初春令月、氣淑風和」（初春の令月にして、氣淑く風和らぐ）であり、「令和」は「令（うるわしい）」と「和（おだやか）」という好ましい字義を組み合わせた元号である。外務省は「令和」を「Beautiful Harmony＝美しい調和」と訳している。

◎大伴坂上郎女（大伴旅人の妹）について



石川内命婦

①神亀四年（七二七）の暮の頃、大伴旅人は妻を伴って大宰府に着任したが、翌神亀五年の四月頃、妻は亡くなった。そのため、旅人の妹の坂上郎女が大宰府に下向した。大伴氏の家刀自（主婦）としての役割を担うためであろう。

②梅花の宴の歌を意識したとおぼしき大伴坂上郎女の歌（年代不明。冬相聞）  
大伴坂上郎女の歌一首

・酒坏さかづきに梅の花うめ浮うけ思おもふどち飲のみての後は散ちりぬともよし（八・一六五六）

\*青柳あをやなぎ梅との花を折をり挿頭かざし飲のみての後は散ちりぬともよし（笠沙弥）と似る。

③天平二年（七三〇）の暮、旅人は大納言に昇任して帰京することになる。坂上郎女は、一足早く十一月に都に向かう。

④「（天平）七年乙亥、大伴坂上郎女、尼理願りぐわんが死去みまかれるを悲しび嘆なげきて作る歌一首 短歌あは并あせたり」とある歌の左注（三・四六一） 歌は省略

右は、新羅国の尼、名を理願といふ。遠く王徳に感じて聖朝に帰化す。時に大納言大將軍大伴卿の家に寄住して、既に数あまた紀のとしを逕へたり。ここに天平七年乙亥を以ちて、忽にはかに運病うんびょうに沈しみて、既に泉界いづみに趣おもむく。ここに大家おほ石川命婦、餌薬にやくの事に依りて有間ありまの温泉ゆ泉すいに往ゆきて、この喪もに会あはず。ただ、郎女独り留りて屍しかばね柩こを葬送むすすること既に訖おほりぬ。よりにてこの歌を作りて温泉ゆに贈り入る。

⑤「大伴坂上郎女、跡見と庄みより、宅いへに留とどまれる女子むすめの大嬢おほいらつめに賜たまふ歌一首」（四・七二三）、「大伴坂上郎女、竹田たけだ庄たじより女子むすめの大嬢おほいらつめに贈る歌二首」（四・七六〇）という題詞のある歌がある。 歌は省略

◎上代文献（主に万葉集）にみる母

1. 子の命名

- ① 既に児生れて後に、天孫就きて問ひて曰はく、「児の名を何に称けば可けむ」といふ。（日本書紀 神代十の3）
- ② 天皇、其の後に命詔して言らさく、「凡そ、子の名は必ず母名けむを、何とか是の子の御名を称はむ。」とのらす。（古事記 垂仁）

2. 娘の監督

- ① たらちねの母に知らえずわが持てる心はよしゑ君がまにまに（一一・二五三七）
- ② 玉垂の小簾の隙に入り通ひ来ねたらちねの母が問はさば風と申さむ  
（一一・二三六四）古歌集
- ③ 汝が母に噴られ吾は行く青雲のいで来吾妹子逢ひ見て行かむ（一四・三五一九）  
未勘国東歌
- ④ たらちねの母に申さな君もわれも逢ふとは無しに年を経ぬべき（一一・二五五七）
- ⑤ かくのみし恋ひば死ぬべみたらちねの母にも告げつ止まず通はせ  
（一一・二五七〇）

3. 養蚕

- たらちねの母が飼ふ蚕の繭隠りいぶせくもあるか妹に逢はずして  
（一一・二九九一）

4. 母の思い

- ① 旅人の宿りせむ野に霜降らばわが子羽ぐくめ天の鶴群（九・一七九一）  
遣唐使の母
- ② うち渡す竹田の原に鳴く鶴の間無く時無しわが恋ふらくは（四・七六〇）  
大伴坂上郎女

5. 母への思い

- ① 家に在りて母がとり見ば慰むる心はあらし死なば死ぬとも（五・八八九）  
山上憶良
- ② 出でて行きし日を数へつつ今日今日と吾を待たすらむ父母らはも（五・八九〇）  
山上憶良
- ③ 真木柱讃めて造れる殿の如いませ母刀自面変りせず（二〇・四三四二）  
駿河防人
- ④ わが母の袖持ち撫でてわが故に泣きし心を忘らえぬかも（二〇・四三五六）  
上総防人

◎万葉集にみる恋愛・結婚から

1. 女性の名前

- ① 難波<sup>なには</sup>潟<sup>がたしほ</sup>潮干<sup>しほひ</sup>に出でて玉藻刈<sup>たまも</sup>る海未通女<sup>うねとめ</sup>ども汝<sup>な</sup>が名<sup>の</sup>告<sup>つ</sup>らさね(九・一七二六) 丹比真人
- ② 漁<sup>あさり</sup>する人<sup>ひと</sup>とを見ませ草枕<sup>くさまくら</sup>旅行<sup>りょぎん</sup>く人<sup>ひと</sup>にわが名<sup>の</sup>は告<sup>つ</sup>らじ(一七二七) 海未通女
- ③ 隼人<sup>はやひと</sup>の名<sup>の</sup>に負<sup>お</sup>ふ夜声<sup>よこゑ</sup>いちしろくわが名<sup>の</sup>は告<sup>つ</sup>りつ妻<sup>つま</sup>と恃<sup>たの</sup>ませ(一一・二四九七) 柿本人麻呂歌集
- ④ 隠沼<sup>こもりぬ</sup>の下<sup>した</sup>ゆ恋<sup>こひ</sup>ふれば為<sup>すべ</sup>方<sup>かた</sup>を無<sup>な</sup>み妹<sup>いもうと</sup>が名<sup>の</sup>告<sup>つ</sup>りつ忌<sup>い</sup>むべきものを(一一・二四四一) 柿本人麻呂歌集

2. 通う男(通ってこなくなる男)

- ① 足<sup>あ</sup>の音<sup>ね</sup>せず行<sup>い</sup>かむ駒<sup>こま</sup>もが葛飾<sup>かつしか</sup>の真間<sup>まま</sup>の継橋<sup>つぎはし</sup>やまず通<sup>とほ</sup>はむ(一四・三三八七) 下総東歌
- ② 思<sup>おも</sup>はぬに到<sup>いた</sup>らば妹<sup>いもうと</sup>が嬉<sup>うれ</sup>しみと笑<sup>わら</sup>まむ眉<sup>まゆ</sup>引き思<sup>おも</sup>ほゆるかも(一一・二五四六)
- ③ 恋<sup>こひ</sup>ひ恋<sup>こひ</sup>ひて逢<sup>あ</sup>へる時<sup>とき</sup>だに愛<sup>うつく</sup>しき言<sup>こと</sup>尽<sup>つ</sup>してよ長<sup>なが</sup>くと思<sup>おも</sup>はば(四・六六一) 大伴坂上郎女
- ④ 朝鴉<sup>あさからす</sup> 早<sup>はや</sup>くな鳴<sup>な</sup>きそわが背<sup>せ</sup>子<sup>こ</sup>が朝明<sup>あさけ</sup>の姿<sup>すがた</sup>見<sup>み</sup>れば悲<sup>かな</sup>しも(一一・三〇九五)
- ⑤ 朝戸<sup>あさと</sup>出<sup>いで</sup>の君<sup>きみ</sup>が足<sup>あし</sup>結<sup>むす</sup>を濡<sup>ぬ</sup>らす露原<sup>つゆはら</sup> つとに起<sup>おこ</sup>き出<sup>い</sup>でつつわれも裳<sup>も</sup>裾<sup>すそ</sup>濡<sup>ぬ</sup>らさな(一一・二三五七)
- ⑥ 春雨<sup>あめ</sup>に衣<sup>い</sup>はいたく通<sup>とほ</sup>らめや七日<sup>なな</sup>し降<sup>ふ</sup>らば七日<sup>なな</sup>来<sup>き</sup>じとや(一〇・一九一七)
- ⑦ 陸奥<sup>むつ</sup>の真野<sup>まの</sup>の草原<sup>くさはら</sup>遠<sup>とほ</sup>けども面影<sup>おもかげ</sup>にして見<sup>み</sup>ゆといふものを(三・三九六) 笠女郎
- ⑧ 相思<sup>あいき</sup>はぬ人<sup>ひと</sup>を思<sup>おも</sup>ふは大寺<sup>おほてら</sup>の餓鬼<sup>うらく</sup>の後<sup>しりへ</sup>に額<sup>ぬか</sup>つくごとし(四・六〇八) 笠女郎
- ⑨ 来<sup>き</sup>むと言<sup>い</sup>ふも来<sup>き</sup>ぬ時<sup>とき</sup>あるを来<sup>き</sup>じと言<sup>い</sup>ふを来<sup>き</sup>むとは待<sup>まち</sup>たじ来<sup>き</sup>じと言<sup>い</sup>ふものを(四・五二七) 大伴坂上郎女

3. 旅の別れ

- ① 君<sup>きみ</sup>が行<sup>い</sup>く海<sup>うみ</sup>辺<sup>べ</sup>の宿<sup>しゆく</sup>に霧<sup>きり</sup>立<sup>た</sup>たば吾<sup>われ</sup>が立<sup>た</sup>ち嘆<sup>なげ</sup>く息<sup>いき</sup>と知<sup>し</sup>りませ(一五・三五八〇) 遣新羅使人の妻
- ② 秋<sup>あき</sup>さらば相<sup>あ</sup>見<sup>み</sup>むものを何<sup>なに</sup>しかも霧<sup>きり</sup>に立<sup>た</sup>つべく嘆<sup>なげ</sup>きしまさむ(一五・三五八一) 遣新羅使人
- ③ 草枕<sup>くさまくら</sup>旅行<sup>りょぎん</sup>く君<sup>きみ</sup>を人<sup>ひと</sup>目<sup>め</sup>多<sup>おほ</sup>み袖<sup>そで</sup>振<sup>ふ</sup>らずしてあまた悔<sup>くは</sup>しも(一二・三一八四) 作者不明
- ④ 蘆垣<sup>あしかき</sup>の隈<sup>くま</sup>処<sup>と</sup>に立<sup>た</sup>ちて吾<sup>われ</sup>妹<sup>いもうと</sup>子<sup>こ</sup>が袖<sup>そで</sup>もしほほに泣<sup>な</sup>きしそ思<sup>おも</sup>はゆ(二〇・四三五七) 上総防人
- ⑤ 吾<sup>われ</sup>等<sup>ら</sup>旅<sup>りょ</sup>は旅<sup>りょ</sup>と思<sup>おも</sup>ほど家<sup>いへ</sup>にして子<sup>こ</sup>持<sup>め</sup>ち瘦<sup>や</sup>すらむわが妻<sup>つま</sup>かなしも(二〇・四三四三) 駿河防人

⑥ 色深く背なが衣は染めましを御坂たばらばま清かに見む (二〇・四四二四)

武蔵防人の妻

⑦ 防人に行くは誰が背と問ふ人を見るが羨しき物思もせず (二〇・四四二五)

昔年の防人の妻

⑧ 君が行く道のながてを繰り畳ね焼きほろぼさむ天の火もがも (一五・三七二四)

狭野弟上娘子

⑨ 畏みと告らずありしをみ越路の手向に立ちて妹が名告りつ (一五・三七三〇)

中臣宅守

⑩ 帰りける人来れりといひしかばほとほと死にき君かと思ひて (一五・三七七二)

狭野弟上娘子

⑪ わが背子が帰り来まさむ時の為命残さむ忘れたまふな (一五・三七七四)

狭野弟上娘子

#### 4. 夫婦

① わが里に大雪降り大原の古りにし里に落らまくは後 (二・一〇三) 天武天皇

② わが岡の霏に言ひて落らしめし雪の摧けし其処に散りけむ (一〇四)

藤原五百重娘

③ わが背子と二人見ませば幾許かこの降る雪の嬉しからまし (八・一六五八)

光明皇后

④ 君がため手力疲れ織りたる衣ぞ 春さらばいかなる色に摺りてば好けむ

(七・一二八一) 柿本人麻呂歌集

⑤ つぎねふ 山背道を 他夫の 馬より行くに 己夫し 歩より行けば 見ること

に 哭のみし泣かゆ 其思ふに 心し痛し たらちねの 母が形見と わが持て

る 真澄鏡に 蜻蛉領巾 負ひ並め持ちて 馬買へわが背 (一三・三三一四)

⑥ 真澄鏡持てれどわれは験なし君が歩行よりなづみ行く見れば (三三一六)

⑦ 馬買はば妹歩行ならむよしゑやし石は履むとも吾は二人行かむ (三三一七)

⑧ 防人に発たむ騒きに家の妹がなるべき事を言はず来ぬかも (二〇・四三六四)

常陸防人

⑨ 紅は移ろふものそ橡の馴れにし衣になほ若かめやも (一八・四一〇九)

大伴家持

【本文】

梅花 譚卅二首 并序

天平二年正月十三日

萃于帥老之宅 申宴会也

于時 初春令月 氣淑風和

梅披鏡前之粉

蘭薰珮後之香

加以

曙嶺移雲 松掛羅而傾蓋

夕岫結霧 鳥封穀而迷林

庭舞新蝶

空歸故雁

於是

蓋天坐地

促膝飛觴

忘言一室之裏

開衿煙霞之外

淡然自放

快然自得

若非翰苑 何以攄情

詩紀落梅之篇

古今夫何異矣

宜賦園梅聊成短詠

【訓読文】

梅花の歌三十二首 序を并せたり

天平二年正月十三日、

帥の老の宅に萃まり、宴会を申ぶ。

時に、初春の令月にして、氣淑く風和らぐ。

梅は鏡前の粉を披き、

蘭は珮後の香を薫らす。

加之、

曙の嶺に雲を移し、松は羅を掛けて蓋を傾け、

夕の岫に霧を結び、鳥は穀に封されて林に迷ふ。

庭には舞ふ新蝶あり、

空には帰る故雁あり。

ここに、

天を蓋とし地を坐とし、

膝を促け觴を飛ばす。

言を一室の裏に忘れ、

衿を煙霞の外に開く。

淡然として自ら放にし、

快然として自ら足る。

若し翰苑に非ざれば、何を以てか情を攄べむ。

詩に落梅の篇を紀す。

古今それ何ぞ異ならむ。

宜しく園梅を賦みて、聊かに短詠を成すべし。

【口語訳】

梅花の歌三十二首 序文を加えた

天平二年正月十三日、

大宰帥の老の屋敷に集まって、宴会を開く。

折しも、初春の良い月で、大気は澄んで風は穏やかだ。

梅は、鏡台のおしろいのように白く咲き、

蘭は、玉佩を着けた人とすれ違ったときのように香る。

さらには、

明け方の峰には雲がたなびき、松は薄物を纏って傘を

差し掛けたようであり、

夕方の山の洞からは霧が湧き立ち、鳥は霧の帳に閉じ

込められて林の中を飛び迷う。

庭には春に生まれた蝶が舞い、

空には去年の秋に來た雁が帰ってゆく。

ここに、

天空を傘とし、大地を敷物としてくつろぎ、

膝を寄せ合って、盃を巡らせる。

一堂に会して、内には言葉も不要なほどに打ち解け、

外には良い景色に向かって襟をくつろげる。

心は淡々として自由であり、

気分は快く満ち足りている。

文筆以外の何によつてこの思いを述べ尽くせようか。

昔の中国には落梅の漢詩がある。

昔と今と、中国と日本と、何の違いがあるうか。

さあ、この庭園の梅を短歌によもうではないか。